

書評 症例問題から学ぶ 生理学 原書4版の刊行に寄せて

栗原 敏 (東京慈恵会医科大学名誉教授)

“症例問題から学ぶ 生理学” 原書4版 (丸善出版) が刊行された。原著者は Linda S. Costanzo 教授で、米国で高い評価を受けている医学教育者である。監訳者は鯉淵典之教授で、鯉淵教授は、これまでも本書の第2版、第3版を監訳されてこられた経験があり、これまでの経験を活かして原書4版の監訳にあたられている。

生理学は生命科学の根幹と言っている。生理学を学ぶことは、人体の正常機能を知り、病態を理解する上で必須である。現在、医学教育は以前とは異なり、基礎医学分野間の連携や、基礎医学と臨床医学の統合を意図してカリキュラムが組まれるようになってきている。これまでの伝統的な生理学の教科書は、内容が次第に増え、制約された時間の中で生理学を深く理解することが次第に難しくなっている。

生理学の教科書は多数出版されており、様々な工夫が凝らされていて学生諸君の学習を助けているが、知識の伝達はどうしても一方的になりがちである。学生は知識を覚える受け身の学習になり、生きた知識にならないことが多い。生理学の体系的な学習と共に、生理学が病態の理解に必要で、臨床医学との関係が極めて深いことを知り、深く病態を考えることができるようになれば、臨床医学を学ぶことが楽しくなるに違いない。

本書は、系統的に生理学を学ぶ学生や、臨床の現場で学生を指導する教員にとって、深く生命の

仕組みを知り、病態を理解する上で大いに参考になるものと思われる。人は問われて初めて気づくことが多い。本書で取り上げられている症例とそれに関する問題は、人の生命の仕組みをより深く理解できるように配慮されている。どの教科書にも巻末などに問題が提示されているが、解説などが簡略化されていて、必ずしも十分でない。本書は症例とそれに関する問題が主体となっているのが特徴で、基本的な事項をとりあげ、深く考えさせ学習を助けるように配慮されており、読んでいて楽しい。翻訳も各訳者の努力によって、翻訳書で時に感じる違和感がない。本書全体の編集が、簡潔に読みやすい構成になっている。また、キーワードが各章末にまとめられており、学習のポイントがよく分かるように配慮されているのもありがたい。

監訳者の鯉淵典之教授は、日本生理学会の前教育委員長で、訳者の一人である南沢享教授は現教育委員長である。お二人は生理学教育の在り方を常に考えており、本書が版を重ねて刊行されているのもそのような両教授の熱意の表れだと感じた。

本書が、生理学の初学者だけでなく、参加型臨床実習が行われている臨床の現場で使われ、病態をより深く理解できるようになれば、実習はより楽しくなり実り多いものになるだろう。多くの方に活用されることを祈念している。

平成31年1月